登録コード	L2620100	開講年度	2026

担当教員	渡邉　匡一	副担当	

授業科目	日本文学概論Ⅰ
英文授業名	Japanese Literature: Introduction Ⅰ
授業タイトル	日本文学概論Ⅰ

単位数	2	対象学生		講義期間	前期	曜日・時限	木曜･６時限
講義室	人文第４講義室		遠隔授業科目		読替科目	読替科目は履修案内を確認すること	

信大コンピテンシー	該当

授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２６Lカリ，２０２５Lカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	多様な日本文学研究の方法や、その変遷について学ぶことで、思索力・受容力・批判力を養います。

授業で学べる「テーマ」	芸術文化
全学横断特別教育プログラム	

授業の概要	主として日本の近代を視野に言語、文化について取り上げながら、多様な文学研究の方法や、その変遷についての概説を行います。様々な研究方法の可能性を探るとともに、現在の研究動向についても分析する予定です。
授業計画	第１回：文学研究とは何かー日本で一番良い本は？ー 第２回：文学研究の目的とはー作品評価は研究か？ー 第３回：文学研究の対象(１)ー本は自分で選べるのか？ー 第４回：文学研究の対象(２)ー旧制松本高校寮生日記ー 第５回：文学研究の対象(３)ー御嶽神社祝詞ー 第６回：文学研究の対象(４)ー山岳図書ー 第７回：文学研究の対象(５)ー文学と絵画①絵巻の技法と種類ー 第８回：文学研究の対象(６)ー文学と絵画①絵巻の技法と種類ー 第９回：文学研究の対象(７)ー『吉備大臣入唐絵巻』を読むー 第10回：文学研究の対象(８)ー狂言①狂言の世界ー 第11回：文学研究の対象(９)ー狂言②「末広がり」から記憶と記録について考えるー 第12回：文学研究の意義（１）ー「稚児の空寝」は、教材としてふわさしいかー 第13回：文学研究の意義（２）ー江戸しぐさなるものの問題ー 第14回：文学研究の歴史(１)ー明治時代以前ー 第15回：文学研究の歴史(２)ー明治時代以後ー
成績評価の方法	レポート（期末80%）、リアクションペーパー（20%）で評価します。
成績評価の基準	以下の基準を総合して、『卓越している』／『かなり上にある』／『やや上にある』／『その水準にある』を判断します。 リアクションペーパー：①講義内容の理解、②①に即した考察。 レポート：①質疑等で指摘された問題点や課題を取り込むこと。②担当話の中に出てくる語句を様々な辞書や書物を用いて調べあげていること。③調べたものを適切な表現で説明できていること。④考察の目的・方法が適当であること。⑤考察の結論に至る論理が適当であること。
事前事後学習の内容	授業進度にあわせてとりあげる資料に目を通した上で授業にのぞみ、授業後には、講義中に提示された論文などを読んで理解を深めつつ、レポート執筆の準備を進めてください。
履修上の注意	毎時間、講義の終わりに意見・質問や感想を書いてもらいます(リアクションペーパー)。質問については次回の講義で確認、補足を行います。
質問、相談への対応	水曜日12:10～13:00をオフィスアワーとします。事前にメール等で連絡してください。
教科書	授業中にプリントを配布します。
参考書	授業中に指示します。

登録コード	L2620200	開講年度	2026

担当教員	渡邉　匡一	副担当	
授業科目	日本文学概論Ⅱ		
英文授業名	Japanese Literature: Introduction Ⅱ		
授業タイトル	日本文学概論Ⅱ		

単位数	2	対象学生		講義期間	後期	曜日・時限	木曜･６時限
講義室	人文第４講義室		遠隔授業科目		読替科目	読替科目は履修案内を確認すること	

信大コンピテンシー	該当

授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２２Ｌカリ，２０２１Ｌカリ，２０２０Ｌカリ		
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】自明とされる事柄に対し、深くその根拠を問い直し新たな認識を構築できる思索力	⇔	多様な日本文学研究の方法や、その変遷について学ぶことで、自明とされる事柄に対し、深くその根拠を問い直し新たな認識を構築できる思索力を養います。
	２０２６Ｌカリ，２０２５Ｌカリ，２０２４Ｌカリ，２０２３Ｌカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	多様な日本文学研究の方法や、その変遷について学ぶことで、思索力・受容力・批判力を養います。

授業で学べる「テーマ」	芸術文化
全学横断特別教育プログラム	

授業の概要	日本古代から現代における言語、文化について具体的な作品や言説を取り上げながら、多様な文学研究の方法や、その変遷についての概説を行います。様々な研究方法の可能性を探るとともに、現在の研究動向についても分析する予定です。
授業計画	第１回：文学研究とは何か 第２回：古代神話の変容（１）『日本書紀』、『古事記』における三種の神器 第３回：古代神話の変容（２）三種の神器・剱譚の変容 第４回：古代神話の変容（３）日本の始まりをめぐって 第５回：古代神話の変容（４）天照太神の性別をめぐって 第６回：古代神話の変容（５）天岩戸の所在地をめぐって 第７回：『源氏物語』の変容（１）平安・鎌倉時代における『源氏物語』の享受 第８回：『源氏物語』の変容（２）室町時代における『源氏物語』の享受 第９回：『源氏物語』の変容（３）江戸時代における『源氏物語』の享受 第10回：『源氏物語』の変容（４）明治時代以降における『源氏物語』の享受 第11回：お伽噺と童話（１）現代の『一寸法師』 第12回：お伽噺と童話（２）江戸時代の『一寸法師』 第13回：地域伝承への展開（１）平安時代の小野小町伝承 第14回：地域伝承への展開（２）室町時代の小野小町伝承 第15回：地域伝承への展開（３）江戸・明治時代以降の小野小町伝承。授業アンケートの実施
成績評価の方法	レポート（期末80%）、リアクションペーパー（20%）で評価します。
成績評価の基準	以下の基準を総合して、『卓越している』／『かなり上にある』／『やや上にある』／『その水準にある』を判断します。 リアクションペーパー：①講義内容の理解、②①に即した考察。 レポート：①質疑等で指摘された問題点や課題を取り込むこと。②担当話の中に出てくる語句を様々な辞書や書物を用いて調べあげていること。③調べたものを適切な表現で説明できていること。④考察の目的・方法が適当であること。⑤考察の結論に至る論理が適当であること。
事前事後学習の内容	授業進度にあわせてとりあげる資料に目を通した上で授業にのぞみ、授業後には、講義中に提示された論文などを読んで理解を深めつつ、レポート執筆の準備を進めてください。
履修上の注意	毎時間、講義の終わりに意見・質問や感想を書いてもらいます(リアクションペーパー)。質問については次回の講義で確認、補足を行います。
質問、相談への対応	水曜日12:10～13:00をオフィスアワーとします。事前にメール等で連絡してください。
教科書	授業中にプリントを配布します。
参考書	授業中に指示します。

登録コード	L2620300		開講年度	2026			
担当教員	速水　香織			副担当			
授業科目	日本文学史Ⅰ						
英文授業名	Cultural Anthropology Ⅰ						
授業タイトル							
単位数	2	対象学生		講義期間	前期	曜日・時限	水曜･３時限
講義室	人文第４講義室		遠隔授業科目		読替科目	読替科目は履修案内を確認すること	
信大コンピテンシー	非該当						
授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素		⇔	【授業の達成目標】			
	２０２２Ｌカリ，２０２１Ｌカリ，２０２０Ｌカリ						
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】異質・多様なものを理解し、寛容かつ多元的に判断することができる受容力		⇔	異なる時代・文化を理解しようと努め、文献を中心とする情報から重要な内容を把握することができる。			
	２０２６Ｌカリ，２０２５Ｌカリ，２０２４Ｌカリ，２０２３Ｌカリ						
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】		⇔	異なる時代・文化を理解しようと努め、文献を中心とする情報から重要な内容を把握し、自ら文章化することができる。			
授業で学べる「テーマ」	芸術文化						
全学横断特別教育プログラム							
授業の概要	古典作品は、時代の変遷に伴って様々に変容し、新たな意味や解釈を与えられながら受け継がれてきました。本講義では、作品の中で語られる逸話、また作品そのものを取上げ、その享受のありようや変容のさまを見てゆきます。						
授業計画	第1回：ガイダンス 第2回：受容と変容―浦島伝説①『日本書記』『万葉集』の逸話 第3回：受容と変容―浦島伝説②浦島伝説の浸透と御伽草子『浦島太郎』 第4回：受容と変容―浦島伝説③教科書に載った『浦島太郎』 第5回：受容と変容―菟原処女の伝説①『万葉集』に詠われた悲恋の娘 第6回：受容と変容―菟原処女の伝説②『大和物語』から謡曲『求塚』へ 第7回：受容と変容―菟原処女の伝説③江戸時代から近現代に受け継がれる菟原処女 第8回：受容と変容―古典作品の視覚化①―人形劇「求塚」― 第9回：受容と変容―古典作品の視覚化②―道成寺伝説に触れる― 第10回：古典作品への評価―『源氏物語』受容の一場面①『源氏物語』と『源氏物語』注釈 第11回：古典作品への評価―『源氏物語』受容の一場面②『源氏物語』を題材とした能楽 第12回：古典作品への評価―『源氏物語』受容の一場面③江戸時代に読まれた『源氏物語』 第13回：古典作品への評価―「俗源氏」・『好色一代男』と井原西鶴への評価 第14回：古典作品への評価―浮世草子の流行と井原西鶴への評価 第15回：まとめ なお、13～15回のいずれかにおいて、授業アンケートを実施する。						
成績評価の方法	毎回の講義で提出するコメント（60%）、期末レポート（40%）によって評価します。						
成績評価の基準	コメント：授業内容への言及・質問の内容によって授業の理解度や受講態度を判断します。 授業中の内容を自己の知識や知見と有機的に結び付け、かつ自身の学修に基づく優れた内容を述べることができていれば「卓越している」、授業に関し具体的で優れた内容を述べることができていれば「かなり上にある」、授業中の内容に関し具体的な内容を述べることができていれば「やや上にある」、授業中の内容に触れた見解を述べることができていれば「その水準にある」と評価します。 レポート：講義内容を把握・理解した上で、日本文学史に関する明確な自己の知見・見解を持つことを、成績評価の水準とします。これが卓越していれば秀、かなり上にあれば優、やや上にあれば良、水準には達していると認められれば可とします。						
事前事後学習の内容	毎回の講義において様々な作品を紹介しますが、取り上げる作品は事前に連絡します。その作品等についてあらかじめ目を通すなど情報を得ておくことを事前学習とします。 また授業後、自己の興味関心に沿って積極的に作品およびその背景の理解に努めることを事後学習とします。						
履修上の注意	毎回の講義で提出いただくコメントの内容を重視します。ただ漫然と講義を聞くだけではない、積極的な受講を望みます。 なお、授業中の私語その他迷惑行為は一切認めません。他の受講生の妨げになると教員が判断した場合は退室を命じ、単位認定を行わない場合があります。						
質問、相談への対応	木曜日12:10～13:00をオフィスアワーとします。面談を希望の場合は、事前にメール等で連絡をお願いします。 メールアドレスはkhayami@shinshu-u.ac.jpです。						
教科書	講義中に適宜プリントを配布します。						
参考書	『新版 日本文学大年表』（市古貞次、久保田淳編、おうふう2002年） ※購入の必要はありません。 その他、講義中に適宜指示します。						

登録コード	L2620400	開講年度	2026

担当教員	速水　香織	副担当	
授業科目	日本文学史Ⅱ		
英文授業名	Cultural Anthropology Ⅱ		
授業タイトル			

単位数	2	対象学生		講義期間	後期	曜日・時限	水曜･３時限
講義室	人文第４講義室		遠隔授業科目		読替科目	読替科目は履修案内を確認すること	

信大コンピテンシー	非該当		
授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２２Lカリ，２０２１Lカリ，２０２０Lカリ		
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】異質・多様なものを理解し、寛容かつ多元的に判断することができる受容力	⇔	異なる時代・文化を理解しようと努め、文献を中心とする情報から重要な内容を把握し、自ら文章化することができる。
	２０２６Lカリ，２０２５Lカリ，２０２４Lカリ，２０２３Lカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	異なる時代・文化を理解しようと努め、文献を中心とする情報から重要な内容を把握し、自ら文章化することができる。
授業で学べる「テーマ」	芸術文化		
全学横断特別教育プログラム			

授業の概要	古典作品は、時代の移り変わりの中で研究され、様々な解釈を与えられながら長い時間を経て現代にまで受け継がれてきました。本講義では、特に和歌文学を中心にその研究史を確認しつつ、平安時代から江戸時代に至る古典文学作品の受容のさまを取り上げます。
授業計画	第1回：ガイダンス 第2回：古典作品の研究と注釈①―『万葉集』の時代 第3回：古典作品の研究と注釈②―『古今和歌集』成立と仮名序 第4回：古典作品の研究と注釈③―『古今和歌集』の部立と和歌内容 第5回：古典作品の研究と注釈④―『古今和歌集』と二十一代集―歌論・歌学の成立 第6回：古典作品の研究と注釈⑤―歌ことばと連歌・俳諧の季語 第7回：古典研究の担い手①―歌道家の発生と「古今伝授」なるもの１ 第8回：古典研究の担い手②―歌道家の発生と「古今伝授」なるもの２ 第9回：古典研究の担い手③―『新古今和歌集』とそれ以後 第10回：古典研究の担い手④―中世における歌道家と御子左家の分裂 第11回：古典研究の担い手⑤―古今伝授資料について 第12回：古典研究の担い手⑥―「古今伝授」近世に至る 第13回：和歌文学の変容①―近世における和歌文学の受容と新たな文芸への広がり 第14回：和歌文学の変容②―和歌と連歌・俳諧の文芸史（近代に至る） 第15回：まとめ なお、13～15回のいずれかにおいて、授業アンケートを実施する。
成績評価の方法	毎回の講義で提出するコメント（60%）、期末レポート（40%）によって評価します。
成績評価の基準	コメント：授業内容への言及・質問の内容によって授業の理解度や受講態度を判断します。 授業中の内容を自己の知識や知見と有機的に結び付け、かつ自身の学修に基づく優れた内容を述べることができていれば「卓越している」、授業に関し具体的で優れた内容を述べることができていれば「かなり上にある」、授業中の内容に関し具体的な内容を述べることができていれば「やや上にある」、授業中の内容に触れた見解を述べることができていれば「その水準にある」と評価します。 レポート：講義内容を把握・理解した上で、日本文学史に関する明確な自己の知見・見解を持つことを、成績評価の水準とします。これが卓越していれば秀、かなり上にあれば優、やや上にあれば良、水準には達していると認められれば可とします。
事前事後学習の内容	毎回の講義において様々な作品を紹介しますが、取り上げる作品は事前に連絡します。その作品等についてあらかじめ目を通すなど情報を得ておくことを事前学習とします。 また授業後、自己の興味関心に沿って積極的に作品およびその背景の理解に努めることを事後学習とします。
履修上の注意	毎回の講義で提出いただくコメントの内容を重視します。ただ漫然と講義を聞くだけではない、積極的な受講を望みます。 なお、授業中の私語その他迷惑行為は一切認めません。他の受講生の妨げになると教員が判断した場合、退室を命じ、単位認定を行わない場合があります。
質問、相談への対応	木曜日12:10～13:00をオフィスアワーとします。面談を希望の場合は、事前にメール等で連絡をお願いします。 メールアドレスはkhayami@shinshu-u.ac.jpです。
教科書	講義中に適宜プリントを配布します。
参考書	『新版 日本文学大年表』（市古貞次、久保田淳編、おうふう2002年） 『歌ことば歌枕大辞典』（久保田淳，馬場あき子編、角川学芸出版2014）

参考書	※購入の必要はありません。 その他、講義中に適宜指示します。

登録コード	L2630100	開講年度	2026

担当教員	速水　香織	副担当	
授業科目	日本文学特論Ⅰ		
英文授業名	Japanese Literature: Specialized Study Ⅰ		
授業タイトル			

単位数	2	対象学生		講義期間	前期	曜日・時限	金曜･１時限
講義室	人文第１講義室		遠隔授業科目		読替科目		

信大コンピテンシー	非該当		
授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２２Lカリ，２０２１Lカリ，２０２０Lカリ		
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】過去の英知の批判的継承のうえに立って創造的な未来を切り拓く開拓力	⇔	過去の文献を精読し、理解することにより、時代の異なる異質な文化や考え方を受容する見識を養い、その見識に基づく自己の考えを明確に表現することができるようになる。
	２０２６Lカリ，２０２５Lカリ，２０２４Lカリ，２０２３Lカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	過去の文献を精読し、理解することにより、時代の異なる異質な文化や考え方を受容する見識を養い、その見識に基づく自己の考えを明確に表現することができるようになる。
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】必要な情報を的確に収集し、理解し、発信する力が身についている。【メディアリテラシー・コミュニケーションリテラシー・外国語能力】	⇔	過去の文献を精読し、理解することにより、時代の異なる異質な文化や考え方を受容する見識を養い、その見識に基づく自己の考えを明確に表現することができるようになる。
授業で学べる「テーマ」	芸術文化、多文化協働		
全学横断特別教育プログラム			

授業の概要	江戸時代は、町人勢力の拡大に伴い、それまでの時代とは異なる、いわゆる大衆文化が形成された時代として位置づけられます。本授業では、特に紀行文や名所記・道中記を取り上げ、その成立状況・内容を確認し、江戸時代以前から引き継がれてきた情報の摂取のあり方を概観したのち、それら文献の歴史的・文学史的な意義について考えます。その際、先行する古典作品、また当時の社会状況や出版メディアなどとの係わりをも視野にいれ、各文献を関連付けながら読み解くことによって、江戸時代の文化に対する理解を深めます。
授業計画	第1回　ガイダンスとイントロダクション 第2回　近世以前の紀行文①中古の紀行文 第3回　近世以前の紀行文②中世の紀行文―特に女房日記に注目する 第4回　近世以前の紀行文③―特に巡礼に注目する 第5回　近世の紀行文①―いくつかの作品と成立（その１） 第6回　近世の紀行文②―いくつかの作品と成立（その２） 第7回　「名所記」の成立①―仮名草子作家・浅井了意について 第8回　「名所記」の成立②―浅井了意作『東海道名所紀』 第9回　近世前期の「旅行情報誌」①―道中記（その１） 第10回　近世前期の「旅行情報誌」②―道中記（その２） 第11回　近世前期の「旅行情報誌」③―道中記（その３） 第12回　旅行・地誌としての情報誌―和歌集などに及ぶ 第13回　近世後期の「名所図会」と関連作品群①―『木曽路名所図会 第14回　近世後期の「名所図会」と関連作品群②―『伊勢参宮名所図会』 第15回　まとめ ※13-15回のいずれかにおいて、授業アンケートを実施します。
成績評価の方法	毎回のコメントを含む平常点（40%）と中間・期末レポート（中間20%・期末40%）によって評価します。
成績評価の基準	コメント：授業内容への言及・質問の内容によって授業の理解度や受講態度を判断します。 授業中の内容を自己の知識や知見と有機的に結び付け、かつ自身の学修に基づく優れた内容を述べることができていれば「卓越している」、授業に関し具体的で優れた内容を述べることができていれば「かなり上にある」、授業中の内容に関し具体的な内容を述べることができていれば「やや上にある」、授業中の内容に触れた見解を述べることができていれば「その水準にある」と評価します。 レポート：講義内容を把握・理解した上で、課題に関する、信憑性の高い根拠に基づく明確な自己の知見・見解を持つことを、成績評価の水準とします。これが卓越していれば秀、かなり上にあれば優、やや上にあれば良、水準には達していると認められれば可とします。
事前事後学習の内容	授業中に適宜プリントを配布するので、それによって授業の予習を行うこと。また、授業中に様々な書籍を紹介するので、自己の興味・関心に従って積極的にそれらの作品に触れ、理解を深めることを事後学習とします。
履修上の注意	毎時間、授業に対する意見や質問をコメントとして提出して戴きます。ただ漫然と授業を聞くだけでない、意欲的な姿勢を期待します。
質問、相談への対応	木曜日12：10～13：00をオフィスアワーとします。必ず事前にメールでの連絡をお願いします。メールアドレスは、khayami@shinshu-u.ac.jpです。
教科書	授業中に適宜プリントを配布します。

参考書	新編日本古典文学全集64「仮名草子集」（谷脇理史ほか編、小学館） 版本地誌大系（臨川書店，全20巻） ※いずれも購入の必要はありません。

登録コード	L2630400	開講年度	2026

担当教員	浅井　航洋	副担当	
授業科目	日本文学特論Ⅳ		
英文授業名	Japanese Literature: Specialized Study Ⅳ		
授業タイトル			

単位数	2	対象学生		講義期間	後期	曜日・時限	水曜･２時限
講義室	人文第５講義室		遠隔授業科目		読替科目		

信大コンピテンシー	非該当

授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２２Ｌカリ，２０２１Ｌカリ，２０２０Ｌカリ		
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】異質・多様なものを理解し、寛容かつ多元的に判断することができる受容力	⇔	日本近代文学がどのように近代という時代と関わったのかについて理解し、それを他者に説明することができる。
	２０２６Ｌカリ，２０２５Ｌカリ，２０２４Ｌカリ，２０２３Ｌカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	近代日本の新聞小説について、基礎的な知識を身につけ、その特徴について他者に説明することができる。
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】必要な情報を的確に収集し、理解し、発信する力が身についている。【メディアリテラシー・コミュニケーションリテラシー・外国語能力】	⇔	先行研究や同時代資料の扱い方を把握し、自分で調査して読み解いて作品読解に応用することができる。

授業で学べる「テーマ」	芸術文化
全学横断特別教育プログラム	

授業の概要	近代日本において、新聞は社会的影響力の大きいメディアだった。新聞に連載される小説は、いわゆる近代文学史において名作と呼ばれる、芸術性の高い小説と比べて多くの読者を持っていた。しかしそうした小説は、発表当時は多くの人に読まれたにもかかわらず、時代と共に忘れ去られてしまったものが多い。その理由として、時代の文脈が読者に共有されなくなったことが挙げられる。時代背景を踏まえてそれらの小説を読み直すことで、当時どのような魅力を持っていたのかを検討していきたい。
授業計画	第1回　ガイダンス（授業の進め方、必要な予習、成績評価の割合や基準など） 第2回　近代日本における新聞というメディア 第3回　新聞と小説との関係 第4回　新聞小説の挿絵 第5回　新聞小説におけるメディアミックスの諸相 第6回　長田幹彦という作家 第7回　長田幹彦「虚栄」概説 第8回　「虚栄」を読む①：掲載媒体との関わり 第9回　「虚栄」を読む②：成金表象との関わり 第10回　「虚栄」を読む③：メロドラマという枠組み 第11回　長田幹彦「白鳥の歌」概説 第12回　「白鳥の歌」を読む①：掲載媒体との関わり 第13回　「白鳥の歌」を読む②：当時の女優表象との関わり 第14回　「白鳥の歌」を読む③：華族表象との関わり 第15回　授業の総括、授業アンケート 定期試験：なし（期末レポート）
成績評価の方法	授業コメント（合計30%）、授業期間中の課題（合計35%）、期末レポート（35%）
成績評価の基準	十分に積極的な態度で授業に参加し、先行研究と同時代資料を博覧精査して作品について説得的で深い読解を提示する課題やレポートが提出されていれば「卓越している」。積極的な態度で授業に参加し、先行研究や同時代資料を十分に調査して作品について説得的な読解を提示する課題やレポートが提出されていれば「かなり上にある」、妥当な態度で授業に参加し、先行研究や同時代資料についてある程度調査して作品について妥当な読解を提示する課題やレポートが提出できていれば「やや上にある」、授業に参加し、先行研究や同時代資料に触れながら作品についてある程度の理解を示した課題やレポートが提出できていれば「水準にある」。
事前事後学習の内容	配布した授業資料で引用した一次資料について、授業後に自分で読み直して解釈してください。その際、意味のとれない箇所や知らない言葉があれば辞書を引いて調べるようにしましょう。
履修上の注意	講義内容を聞き取り、自分なりに整理してメモやノートを取って下さい。漫然と聞いているだけでは、頭に入りません。知識と想像力を総動員して主体的に取り組んで下さい。 生成ＡＩの使用はブレインストーミングや文章校正・誤字脱字のチェックなど補助的な用途に限り認めます。主張や内容に関わる部分を生成ＡＩに執筆させたものは不可とします。
質問、相談への対応	木曜のお昼休み（12時10分～13時）をオフィスアワーとしますので、希望される方はメールで予約して下さい。 asai@shinshu-u.ac.jp
教科書	購入不要。プリントを配布します。

参考書	本田康雄『新聞小説の誕生』平凡社、1998年 関肇『新聞小説の時代』新曜社、2007年

登録コード	L2630700	開講年度	2026

担当教員	速水　香織	副担当	
授業科目	日本文学基幹演習Ⅰ		
英文授業名	Japanese Literature: Basic Seminar Ⅰ		
授業タイトル			

単位数	2	対象学生		講義期間	前期	曜日・時限	水曜･４時限
講義室	人文第１講義室		遠隔授業科目		読替科目	読替科目は履修案内を確認すること	

信大コンピテンシー	非該当

授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２２Ｌカリ，２０２１Ｌカリ，２０２０Ｌカリ		
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】異質・多様なものを理解し、寛容かつ多元的に判断することができる受容力	⇔	テクストの正確な読解能力及び文献調査能力を向上することにより、実証的な分析考察を可能にする思考力を獲得する。
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】情報を適切に集約・分析・表現できる高度なメディアリテラシー	⇔	精確な読解力に基づいた考察内容を他者に効果的に伝えるプレゼンテーション能力を獲得する。
	２０２６Ｌカリ，２０２５Ｌカリ，２０２４Ｌカリ，２０２３Ｌカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	テクストの正確な読解能力及び文献調査能力を向上することにより、実証的な分析考察を可能にする思考力を獲得する。
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】必要な情報を的確に収集し、理解し、発信する力が身についている。【メディアリテラシー・コミュニケーションリテラシー・外国語能力】	⇔	精確な読解力に基づいた考察内容を他者に効果的に伝えるプレゼンテーション能力を獲得する。

授業で学べる「テーマ」	芸術文化
全学横断特別教育プログラム	

授業の概要	佐々木弘綱編『明治開化和歌集』および寺門静軒作『江戸繁昌記』を取り上げ、注釈作業を行います。具体的には、先行研究を十分に踏まえた担当個所の語釈、口語訳、他作品との比較及び素材の確認、問題点の考察を主な作業とします。
授業計画	第1回　　イントロダクション 第2回　　作品と作者・編者についての概説 第3回　　担当の決定と作業の確認 第4回　　語釈・口語訳にあたっての資料解説 第5回　　考察方法の確認 第6回　　周辺資料について 第7回　　担当者の発表（相撲の段）と質疑応答 第8回　　担当者の発表（吉原の段）と質疑応答 第9回　　担当者の発表（劇場の段）と質疑応答 第10回　担当者の発表（千人会の段）と質疑応答 第11回　担当者の発表（浅草寺の段）と質疑応答 第12回　担当者の発表（楊花の段）と質疑応答 第13回　担当者の発表（両国の煙火の段）と質疑応答 第14回　担当者の発表（売卜先生の段）と質疑応答 第15回　まとめ・講評 定期試験　実施しない。 ※13-15回のうちいずれかに、授業アンケートを実施します。
成績評価の方法	発表の内容（50%）、質疑応答（40%）、レポート（10%）によって評価します。 毎回の授業における、質疑への積極的な姿勢を重視します。
成績評価の基準	担当個所の語釈、口語訳、素材の確認、問題点の考察が一通り不足なく行われ、毎回の授業において質疑に参加していることを、成績評価の基準（可）とします。これが良好に行われていれば良、優れていれば優、卓越していれば秀と評価します。
事前事後学習の内容	担当箇所の発表準備はもちろんのこと、毎回の発表に対する質疑応答の状況も重視しますので、充実した質疑を行えるだけの準備を行ってください。質疑を行えるだけの事前準備も事前学習に含みます。また、発表内容の補足・再調査等を事後学習とします。
履修上の注意	後期開講科目「日本文学発展演習Ⅰ」は、本授業の単位修得済みであることを前提としますので、履修予定の方は、必ず本授業を受講してください。 発表の準備、特に語釈と問題点の考察には多くの時間を費やすことになりますので、その予定で臨んで下さい。 発表者には授業時間と参加者に対する、責任ある態度を期待します。
質問、相談への対応	木曜日12：10～13：00をオフィスアワーとします。 必要があればその他の曜日・時間も可能な限り対応しますが、必ず事前にメールにて連絡をお願いします。（事前連絡がない場合、対応しないことがあります。） メールアドレスは、khayami@shinshu-u.ac.jpです。
教科書	新日本古典文学大系明治編4『和歌 俳句 歌謡 音曲集』（久保田啓一ほか校注、岩波書店2003）

教科書	新日本古典文学大系100『江戸繁昌記 柳橋新誌』（日野龍夫校注、岩波書店1989） ※いずれも購入の必要はありません。
参考書	『新訂 江戸名所図会』全8巻（市古夏生・鈴木健一編，ちくま学芸文庫）※購入の必要はありません その他、授業中に必要に応じて指示します。

登録コード	L2631000	開講年度	2026

担当教員	渡邉　匡一	副担当	
授業科目	日本文学基幹演習Ⅳ		
英文授業名	Japanese Literature: Basic Seminar Ⅳ		
授業タイトル	日本文学基幹演習Ⅰ		

単位数	2	対象学生		講義期間	前期	曜日・時限	木曜･３時限
講義室	人文２０４演習室		遠隔授業科目		読替科目	読替科目は履修案内を確認すること	

信大コンピテンシー	非該当

授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２２Lカリ，２０２１Lカリ，２０２０Lカリ		
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】他者の考えを明晰に理解し、自己の主張を的確に表現できる高度なコミュニケーションリテラシー	⇔	他者の考えを明晰に理解し、自己の主張を的確に表現できる高度なコミュニケーションリテラシーを養います。
	２０２６Lカリ，２０２５Lカリ，２０２４Lカリ，２０２３Lカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	様々な語彙の注釈作業を通して作品を理解し、考察を通して古典世界を理解することによって、思索力・受容力・批判力を養います。
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】必要な情報を的確に収集し、理解し、発信する力が身についている。【メディアリテラシー・コミュニケーションリテラシー・外国語能力】	⇔	様々な語彙の注釈作業を通して作品を理解し、考察を通して古典世界を理解することによって、必要な情報を的確に収集し、理解し、発信する力を養います。

授業で学べる「テーマ」	芸術文化
全学横断特別教育プログラム	

授業の概要	古典作品の研究は、人物（皇族・貴族・武士など）・場所・建物・難語句など、文章に出てくる様々な言葉の意味を理解する（語釈する）ことから始まります。授業では『今昔物語集』を用い、発表者には、①担当話の中に出てくる語句を様々な辞書や書物を用いて調べあげること、②その上で、担当話の考察をおこなうこと、が要求されます。また、発表に対する質疑応答も、研究を高めていく上で重要な役割を果たします。発表を聞く人には、発表者に対する質問や意見を述べることが要求されます。また、資料解読の技術を習得するために、諏訪市仏法紹隆寺、木曾郡王滝村御嶽神社所蔵の資料等も利用します。
授業計画	第１回：古典作品を研究するための基礎作業の概説 第２回：『今昔物語集』の概説 第３回：担当話の確定 第４回：人物の調べ方を理解する。 第５回：場所の調べ方を理解する。 第６回：建物、服装などの調べ方を理解する。 第７回：難語句の調べ方を理解する。 第８回：考察の方法を理解する。 第９回：第一話の担当者が発表する。質疑応答によって課題を確認する。 第10回：第二話の担当者が発表する。質疑応答によって課題を確認する。 第11回：第三話の担当者が発表する。質疑応答によって課題を確認する。 第12回：第四話の担当者が発表する。質疑応答によって課題を確認する。 第13回：第五話の担当者が発表する。質疑応答によって課題を確認する。 第14回：第六話の担当者が発表する。質疑応答によって課題を確認する。 第15回：第七話の担当者が発表する。質疑応答によって課題を確認する。授業アンケートの実施 学生の研究内容・理解度等により、各回の計画を変更することがあり得ます。
成績評価の方法	発表（60%）、レポート(30%)、質疑応答（10%）で評価します。
成績評価の基準	以下の基準を総合して、『卓越している』／『かなり上にある』／『やや上にある』／『その水準にある』を判断します。 発表：①担当話の中に出てくる語句を様々な辞書や書物を用いて調べあげていること。②調べたものを適切な表現で説明できていること。③考察の目的・方法が適当であること。④考察の結論に至る論理が適当であること。⑤質疑に際して適切な答弁ができること。 レポート：①質疑等で指摘された問題点や課題を取り込むこと。②担当話の中に出てくる語句を様々な辞書や書物を用いて調べあげていること。③調べたものを適切な表現で説明できていること。④考察の目的・方法が適当であること。⑤考察の結論に至る論理が適当であること。
事前事後学習の内容	他受講者の担当話については必ず事前に読んでおくことが必要です。また、発表や質疑等で問題となった事項については、論文や研究書で確認しておくことも必要です。
履修上の注意	各受講者には、指導の学生がつきます。よく相談しながら発表の準備をする必要があります。
質問、相談への対応	木曜日12:10～13:00をオフィスアワーとします。事前にメール等で連絡してください。メールアドレス

質問、相談への対応	はkwata@shinshu-u.ac.jpです。
教科書	『宇治拾遺物語』(角川ソフィア文庫)　1,080円
参考書	『今昔物語集・宇治拾遺物語』（新潮古典アルバム9）　1300円

登録コード	L2640100	開講年度	2026

担当教員	速水　香織	副担当	
授業科目	日本文学発展演習Ⅰ		
英文授業名	Japanese Literature: Advanced Seminar Ⅰ		
授業タイトル			

単位数	2	対象学生		講義期間	後期	曜日・時限	水曜･４時限
講義室	人文第１講義室		遠隔授業科目		読替科目	読替科目は履修案内を確認すること	

信大コンピテンシー	非該当		
授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２２Ｌカリ，２０２１Ｌカリ，２０２０Ｌカリ		
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】過去の英知の批判的継承のうえに立って創造的な未来を切り拓く開拓力	⇔	テクストの正確な読解能力及び文献調査能力を向上することにより、実証的な分析考察を可能にする思考力を獲得する。
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】情報を適切に集約・分析・表現できる高度なメディアリテラシー	⇔	精確な読解力に基づいた考察内容を他者に効果的に伝えるプレゼンテーション能力を獲得する。
	２０２６Ｌカリ，２０２５Ｌカリ，２０２４Ｌカリ，２０２３Ｌカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	テクストの正確な読解能力及び文献調査能力を向上することにより、実証的な分析考察を可能にする思考力を獲得する。
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】必要な情報を的確に収集し、理解し、発信する力が身についている。【メディアリテラシー・コミュニケーションリテラシー・外国語能力】	⇔	精確な読解力に基づいた考察内容を他者に効果的に伝えるプレゼンテーション能力を獲得する。
授業で学べる「テーマ」	芸術文化		
全学横断特別教育プログラム			

授業の概要	江戸時代初期に刊行された仮名草子『女郎花物語』（板本）を取り上げ、注釈作業を行います。具体的には、担当個所の翻字、語釈、口語訳、和歌の解釈、素材及び典拠の考察を主な作業とします。
授業計画	第1回　　イントロダクション 第2回　　北村季吟と『女郎花物語』についての概説 第3回　　担当の決定と作業の確認 第4回　　翻字作業 第5回　　語釈・口語訳にあたっての資料解説 第6回　　考察方法の確認 第7回　　資料作成と確認① 第8回　　資料作成と確認② 第9回　　担当者の発表（下照姫の段）と質疑応答 第10回　担当者の発表（豊玉姫・木花咲耶姫の段）と質疑応答 第11回　担当者の発表（衣通姫の段）と質疑応答 第12回　担当者の発表（采女の段）と質疑応答 第13回　担当者の発表（橘嘉智子の段）と質疑応答 第14回　担当者の発表（女一宮紀伊の段）と質疑応答 第15回　まとめ 定期試験　レポート なお、13～15回のいずれかにおいて、授業アンケートを実施します。
成績評価の方法	発表の内容（50%）、質疑応答（40%）、レポート（10%）によって評価します。 質疑への積極的な姿勢を重視します。
成績評価の基準	担当個所の翻字、語釈、口語訳、和歌の解釈、素材及び典拠の考察が一通り行えていることを成績評価の基準（可）とします。これらが良好な水準であれば良、優れていれば優、卓越していれば秀と評価します。
事前事後学習の内容	発表の周到な準備、および質疑の準備が事前学習となります。また、発表内容の補足・再調査等を事後学習とします。
履修上の注意	前期開講科目「日本文学基幹演習Ⅰ」の単位修得済みであることを履修の前提とします。同科目の単位が修得されていない場合、受講を認めないことがあります。 発表の準備、特に語釈と問題点の考察には多くの時間を費やすことになりますので、その予定で臨んで下さい。 発表者には授業時間と参加者に対する、責任ある態度を望みます。
質問、相談への対応	毎週木曜日12:10～13:00をオフィス・アワーとします。他の時間帯でも、可能な限り対応しますので、事前にメールで連絡をお願いします。 （事前連絡がない場合、対応しないことがあります。） メールアドレスは、khayami@shinshu-u.ac.jpです。
教科書	『仮名草子集成』第8巻（東京堂出版1997） 近世文学資料類従 仮名草子編13『薄雪物語・女郎花物語』（勉誠社1973） ※いずれも購入の必要はありません。 ほか、授業中に適宜プリントを配布します。また、毎回の発表者に、資料の作成をお願いします。

参考書	授業中に必要に応じて指示します。

登録コード	L2640400	開講年度	2026

担当教員	浅井　航洋	副担当	
授業科目	日本文学発展演習Ⅳ		
英文授業名	Japanese Literature: Advanced Seminar Ⅳ		
授業タイトル			

単位数	2	対象学生		講義期間	後期	曜日・時限	木曜･３時限
講義室	人文第５講義室		遠隔授業科目		読替科目		

信大コンピテンシー	非該当		
授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２２Ｌカリ，２０２１Ｌカリ，２０２０Ｌカリ		
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】情報を適切に集約・分析・表現できる高度なメディアリテラシー	⇔	日本近代文学がどのように近代という時代と関わったのかについて理解し、それを他者に説明することができる。
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】他者の考えを明晰に理解し、自己の主張を的確に表現できる高度なコミュニケーションリテラシー	⇔	
	２０２６Ｌカリ，２０２５Ｌカリ，２０２４Ｌカリ，２０２３Ｌカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	日本近代文学の作品を精読し、その内容や表現について深く理解し、他者に説明することができる。
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】必要な情報を的確に収集し、理解し、発信する力が身についている。【メディアリテラシー・コミュニケーションリテラシー・外国語能力】	⇔	作品と同時代の資料を調査し、読解に応用することができる。
授業で学べる「テーマ」	芸術文化		
全学横断特別教育プログラム			

授業の概要	尾崎紅葉は明治を代表する文学者であり、『金色夜叉』はその代表作である。本作は紅葉の死により未完に終わったが、発表当時は絶大な人気を誇った。その通俗性から、代表作でありながら後世の文壇からの評価は高くなかったが、それはむしろ時代性が濃厚だった証左だと言えるのではないか。つまり、時代との結びつきが強かったからこそ、時代が過ぎ去ったことでその魅力が薄れてしまったのである。 本演習ではそうした時代との結びつきを意識しながら、この作品を精読する。そのストーリーだけではなく、紅葉が苦心した文体を味わい、明治という時代と本作がどのように関わり合っているかを検討していく。
授業計画	第1回　ガイダンス（授業の進め方、必要な予習、成績評価の割合や基準など） 第2回　レジュメの作成方法、担当者決め 第3回　『金色夜叉』を読む：前編第一章～前編第六章 第4回　『金色夜叉』を読む：前編第七章～中編第一章 第5回　『金色夜叉』を読む：中編第二章～中編第四章 第6回　『金色夜叉』を読む：中編第五章～中編第六章 第7回　『金色夜叉』を読む：中編第七章～後編第一章 第8回　『金色夜叉』を読む：後編第二章～後編第四章 第9回　『金色夜叉』を読む：後編第五章～後編第七章 第10回　『金色夜叉』を読む：続・第一章～続第四章（一） 第11回　『金色夜叉』を読む：続・第四章（二）～続第六章 第12回　『金色夜叉』を読む：続第七章～続続第一章 第13回　『金色夜叉』を読む：続続第二章～続続第四章 第14回　『金色夜叉』を読む：続続第五章～新続第三章 第15回　授業の総括、授業アンケート 定期試験：なし（期末レポート）
成績評価の方法	平常点（授業中の発言など）15%、発表45%、期末レポート40%の割合で総合的に評価します。
成績評価の基準	十分に積極的な態度で授業に参加し、先行研究と同時代資料を博覧精査して作品について説得的で深い読解を提示する発表やレポートが提出されていれば「卓越している」。積極的な態度で授業に参加し、先行研究や同時代資料を十分に調査して作品について説得的な読解を提示する発表やレポートが提出されていれば「かなり上にある」、妥当な態度で授業に参加し、先行研究や同時代資料についてある程度調査して作品について妥当な読解を提示する発表やレポートが提出できていれば「やや上にある」、授業に参加し、先行研究や同時代資料に触れながら作品についてある程度の理解を示した発表やレポートが提出できていれば「水準にある」。
事前事後学習の内容	たとえ自分が発表者でなかったとしても、発表で扱われる範囲を読んだ上で授業に臨んでください。 発表資料の作成には時間がかかりますので、十分な余裕を持って取り組んでください。
履修上の注意	教科書は必ず購入してください。『金色夜叉』の版本は多くありますが、ページ数を揃えたいので、教科書に指定した版以外は使用しないでください。 生成ＡＩの使用はブレインストーミングや文章校正・誤字脱字のチェックなど補助的な用途に限り認めます。主張や内容に関わる部分を生成ＡＩに執筆させたものは不可とします。

質問、相談への対応	木曜のお昼休み（12時10分～13時）をオフィスアワーとしますので、希望される方はメールで予約して下さい。 asai@shinshu-u.ac.jp
教科書	尾崎紅葉『金色夜叉』新潮文庫改版（新潮社、1969年初版、2004年改版）
参考書	授業中に紹介します。

登録コード	L2720100	開講年度	2026

担当教員	中澤　光平	副担当	

授業科目	日本語学概論Ⅰ

英文授業名	Japanese Linguistics: Introduction Ⅰ

授業タイトル	日本語学の基礎

単位数	2	対象学生		講義期間	前期	曜日・時限	木曜･１時限
講義室	人文第４講義室		遠隔授業科目		読替科目	読替科目は履修案内を確認すること	

信大コンピテンシー	非該当

授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２２Lカリ，２０２１Lカリ，２０２０Lカリ		
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】自明とされる事柄に対し、深くその根拠を問い直し新たな認識を構築できる思索力	⇔	日本語という身近な存在に対し、音声学や言語学の知識をもとに客観的な分析ができるようになる。
	２０２６Lカリ，２０２５Lカリ，２０２４Lカリ，２０２３Lカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	日本語学に関する基本的な概念・用語を理解し、日本語を言語学的な観点から分析することができるようになる。

授業で学べる「テーマ」	芸術文化、多文化協働

全学横断特別教育プログラム	ローカル･イノベーター養成コース

授業の概要	日本語には古代から現代までという時間的（歴史的）多様性と、方言という空間的（地理的）多様性がある。そのように多様な日本語をどのように分析するかという視点が日本語学には必要である。この授業では、日本語の体系的、網羅的な分析を通じて日本語研究の方法を学び、論理的な思考力を身につけることを目的とする。 「概論Ⅰ」では現代日本語（共通語）を主な対象として、日本語学に関する学術的な概念・用語について解説する。単に丸暗記するのではなく、自ら問題を発見し解決するのに役立つ能動的な知の習得を目指す。内容は音声・音韻、文字・表記、語彙、文法などに分けて扱うが、相互の有機的な結び付きを意識し多角的な分析が行えるようになることを目標とする。

授業計画	第１回　「日本語学概論Ⅰ」について 第２回　日本語の文字・表記 第３回　日本語の音（１）：音声と音韻／母音／子音（１） 第４回　日本語の音（２）：子音（２）／特殊拍・音節構造 第５回　日本語の音（３）：超分節音 第６回　日本語と語形成 第７回　日本語の品詞分類／活用語 第８回　日本語の文の組み立て 第９回　日本語のヴォイス 第10回　日本語のテンス、アスペクト 第11回　日本語のモダリティ／文タイプ 第12回　日本語の語彙（１）：語と意味（類義・反義・多義・包摂関係） 第13回　日本語の語彙（２）：語種／位相語 第14回　日本語と敬語 第15回　まとめ、授業アンケート 定期試験

成績評価の方法	リアクションペーパーに基づく平常点（50%）と期末試験（50%）をもとに評価する。 リアクションペーパーは第２回～第14回の計13回分の提出が求められる。 期末試験は下記のいずれかを満たす場合に受験を認める。 ・出席が12回以上（初回、最終回を含む） ・アンケート（リアクションペーパー、授業アンケートとは別）への回答が10回以上 ・授業期間中に実施する確認小テストの得点が８割以上

成績評価の基準	日本語学の重要事項を不完全ながらも理解し表現できる水準への評価は「可（その水準にある）」 日本語学の重要事項を正確に理解し表現できる水準への評価は「良（やや上にある）」 日本語学の全体を理解し表現できる水準への評価は「優（かなり上にある）」 日本語学の全体を理解したうえで自主的な学習の成果が認められる水準への評価は「秀（卓越している）」 上記に至らないものは「不可」

事前事後学習の内容	講義内容について復習して知識の定着を図るとともに、参考書等により予習を行うこと。 60時間以上の時間外学習が必要となる。予習と復習は併せて毎回４～５時間程度行うこと。

履修上の注意	「日本語学概論Ⅱ」は「概論Ⅰ」を履修していることが前提となる。そのため、教職課程その他の関係で「日本語学概論」を１つ履修する予定の場合は「概論Ⅰ」の履修を強く推奨する。 日本言語文化コース所属（希望）の学生は「日本語学概論Ⅱ」も履修することを推奨する。また、「日本語史」の授業を受講する場合、事前もしくは同時に「日本語学概論」を受講しておくのが望ましい。

質問、相談への対応	できるだけ講義が終わった後に質問するように。授業後に提出を課すリアクションペーパーに質問事項を

質問、相談への対応	書いてもよい。必要であれば教員あてにメールでアポイントメントをとること（メールアドレスは kohein@shinshu-u.ac.jp）。
教科書	使用せず、毎回プリントを配布する。
参考書	沖森卓也（編著）（2010）『日本語概説』朝倉書店 衣畑智秀（編）（2023）『基礎日本語学　第２版』ひつじ書房

登録コード	L2720200	開講年度	2026

担当教員	中澤　光平	副担当	
授業科目	日本語学概論Ⅱ		
英文授業名	Japanese Linguistics: Introduction Ⅱ		
授業タイトル	日本語の多様性		

単位数	2	対象学生		講義期間	後期	曜日・時限	木曜･１時限
講義室	人文２１２講義室		遠隔授業科目		読替科目	読替科目は履修案内を確認すること	

信大コンピテンシー	非該当		
授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２２Lカリ，２０２１Lカリ，２０２０Lカリ		
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】自明とされる事柄に対し、深くその根拠を問い直し新たな認識を構築できる思索力	⇔	日本語という身近な存在に対し、音声学や言語学の知識をもとに客観的な分析ができるようになる。
	２０２６Lカリ，２０２５Lカリ，２０２４Lカリ，２０２３Lカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	日本語学に関する基本的な概念・用語を理解し、日本語を言語学的な観点から分析することができるようになる。
授業で学べる「テーマ」	芸術文化、多文化協働		
全学横断特別教育プログラム	ローカル･イノベーター養成コース		

授業の概要	日本語には古代から現代までという時間的（歴史的）多様性と、方言という空間的（地理的）多様性がある。そのように多様な日本語をどのように分析するかという視点が日本語学には必要である。この授業では、日本語の体系的、網羅的な分析を通じて日本語研究の方法論を学び、論理的な思考力を身につけることを目的とする。 「概論Ⅱ」では古代語および奄美・沖縄の言語を含む日本語の諸方言を対象として、日本語学に関する学術的な概念・用語について解説する。単に丸暗記するのではなく、自ら問題を発見し解決するのに役立つ能動的な知の習得を目指す。内容は音声・音韻、文字・表記、語彙、文法などに分けて扱うが、相互の有機的な結び付きを意識し多角的な分析が行えるようになることを目標とする。
授業計画	第１回　日本語の範囲 第２回　日本語の文字・表記の多様性 第３回　日本語の音の多様性（１）：母音、子音、音節構造 第４回　日本語の音の多様性（２）：アクセント、イントネーション 第５回　日本語の活用の多様性 第６回　日本語の語形成の多様性 第７回　日本語の語形の多様性 第８回　日本語の助詞の多様性 第９回　日本語のヴォイスの多様性 第10回　日本語のテンス、アスペクトの多様性 第11回　日本語のモダリティ、文タイプの多様性 第12回　日本語の語義の多様性 第13回　日本語の比喩表現の多様性 第14回　日本語の敬語の多様性 第15回　まとめ、授業アンケート 定期試験
成績評価の方法	リアクションペーパーに基づく平常点（50%）と期末試験（50%）をもとに評価する。 リアクションペーパーは第２回～第14回の計13回分の提出が求められる。 期末試験は下記のいずれかを満たす場合に受験を認める。 ・出席が12回以上（初回、最終回を含む） ・アンケート（リアクションペーパー、授業アンケートとは別）への回答が10回以上 ・授業期間中に実施する確認小テストの得点が８割以上
成績評価の基準	日本語学の重要事項を不完全ながらも理解し表現できる水準への評価は「可（その水準にある）」 日本語学の重要事項を正確に理解し表現できる水準への評価は「良（やや上にある）」 日本語学の全体を理解し表現できる水準への評価は「優（かなり上にある）」 日本語学の全体を理解したうえで自主的な学習の成果が認められる水準への評価は「秀（卓越している）」 上記に至らないものは「不可」
事前事後学習の内容	講義内容について復習して知識の定着を図るとともに、参考書等により予習を行うこと。 60時間以上の時間外学習が必要となる。予習と復習は併せて毎回４～５時間程度行うこと。
履修上の注意	「日本語学概論Ⅱ」は「概論Ⅰ」を履修していることが前提となる。そのため、教職課程その他の関係で「日本語学概論」を１つ履修する予定の場合は「概論Ⅰ」の履修を強く推奨する。「概論Ⅰ」が既習でない場合、「概論Ⅱ」の履修は推奨しない。どうしても履修を希望する場合は授業担当教員に相談すること。 日本言語文化コース（日本語学）所属（を希望している）学生は「概論Ⅱ」を履修することを強く推奨する。また、「日本語史」の授業を受講する場合、事前もしくは同時に「日本語学概論Ⅰ・Ⅱ」を受講しておくのが望ましい。

質問、相談への対応	できるだけ講義が終わった後に質問するように。授業後に提出を課すリアクションペーパーに質問事項を書いてもよい。必要であれば教員あてにメールでアポイントメントをとること（メールアドレスは kohein@shinshu-u.ac.jp）。
教科書	使用せず、毎回プリントを配布する。
参考書	衣畑智秀（編）（2023）『基礎日本語学　第２版』ひつじ書房 井上史雄ほか（編著）（2016）『はじめて学ぶ方言学　ことばの多様性をとらえる28章』ミネルヴァ書房 木部暢子ほか（編著）（2013）『方言学入門』三省堂 工藤真由美・八亀裕美（2008）『複数の日本語』講談社

登録コード	L2720300	開講年度	2026

担当教員	鈴木　裕也	副担当	

授業科目	日本語史Ⅰ
英文授業名	Historical Linguistics of Japanese Ⅰ
授業タイトル	日本語史（上代、中古）

単位数	2	対象学生	1〜4	講義期間	前期	曜日・時限	金曜･４時限
講義室	人文第４講義室		遠隔授業科目		読替科目		

信大コンピテンシー	非該当

授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２６Lカリ，２０２５Lカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	日本語学（日本語史）の基本的事項について理解することで、日本語について疑問や関心を持ち、日本語の分析方法を修得することができるようになる。

授業で学べる「テーマ」	芸術文化
全学横断特別教育プログラム	

授業の概要	日本語学とは、日本語を研究する学問である。現代日本語を考える上でも、過去の日本語と比較する視点は欠かすことができない。本授業は、日本語史（日本語の歴史）の基本的事項を概説することを目的とする。「日本語史Ⅰ」では、上代・中古（奈良時代から平安時代）を対象とする。
授業計画	第１回　ガイダンス、時代区分 第２回　漢字の伝来 第３回　万葉仮名 第４回　上代特殊仮名遣（音韻） 第５回　上代特殊仮名遣（文法） 第６回　講読Ⅰ（上代語資料） 第７回　仮名 第８回　頭音法則、音便 第９回　ハ行転呼音 第10回　濁音、連濁 第11回　講読Ⅱ（和文資料） 第12回　日本漢字音 第13回　和漢の混淆（文体） 第14回　いろはうた、五十音図 第15回　講読Ⅲ（訓点資料）、授業アンケート 期末試験
成績評価の方法	期末試験により評価する（100%）。期末試験は論述式で行い、日本語学（日本語史）の基本的事項を理解し、説明できるかどうかを評価の基準とする（持ち込み不可）。
成績評価の基準	日本語学（日本語史）の重要事項を最低限理解し表現できる水準への評価は「可（その水準にある）」 日本語学（日本語史）の重要事項を正確に理解し表現できる水準への評価は「良（やや上にある）」 日本語学（日本語史）の全体を理解し表現できる水準への評価は「優（かなり上にある）」 日本語学（日本語史）の全体を理解し自主的な学習の成果が認められる水準への評価は「秀（卓越している）」 上記に至らないものは「不可」
事前事後学習の内容	各回で取り扱った内容で理解できなかった部分・興味を持った部分について、参考書・各回の資料に挙げる参考文献を読む。日本語学に興味を持っている方は、以下の参考書を一読することを推奨する。期末試験前は、授業資料や参考書などで日本語学の基本的事項を復習する。
履修上の注意	高等学校までで学ぶ文法事項を復習し、理解しておく。不安な方は高等学校で用いていた文法書を持参するとよい。 「日本語学概論ⅠⅡ」「日本語史Ⅱ」を合わせて履修することを推奨する。日本語学の内容は難解なものが多いので、合わせて履修することで理解が深まる。「日本語史Ⅱ」は「日本語史Ⅰ」と連続する内容である。
質問、相談への対応	質問・相談用のformsにて受け付ける（URLはeALPSに掲載する）。
教科書	指定しない。
参考書	購入は必須ではない。 衣畑智秀（編）2023『基礎日本語学（第2版）』（ひつじ書房）9784823411953、1800円 木田章義（編）2013『国語史を学ぶ人のために』（世界思想社）9784790715962、2900円 風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健2004『言語学（第2版）』（東京大学出版会）9784130820097、2500円 佐藤武義（編）1995『概説日本語の歴史』（朝倉書店）9784254510195、2900円 野村剛史2010『話し言葉の日本史』（吉川弘文館）9784642057110、1870円

登録コード	L2720400	開講年度	2026

担当教員	鈴木　裕也	副担当	
授業科目	日本語史Ⅱ		
英文授業名	Historical Linguistics of Japanese Ⅱ		
授業タイトル	日本語史（中世、近世、近代）		

単位数	2	対象学生	1〜4	講義期間	後期	曜日・時限	火曜･２時限
講義室	人文第４講義室		遠隔授業科目		読替科目		

信大コンピテンシー	非該当		
授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２２Ｌカリ，２０２１Ｌカリ，２０２０Ｌカリ		
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】自明とされる事柄に対し、深くその根拠を問い直し新たな認識を構築できる思索力	⇔	日本語学（日本語史）の基本的事項について理解することで、日本語について疑問や関心を持つことができるようになる。
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】異質・多様なものを理解し、寛容かつ多元的に判断することができる受容力	⇔	日本語についての疑問や関心を持ち、日本語の分析方法を修得することができるようになる。
	２０２６Lカリ，２０２５Lカリ，２０２４Lカリ，２０２３Lカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	日本語学（日本語史）の基本的事項について理解することで、日本語について疑問や関心を持ち、日本語の分析方法を修得することができるようになる。
授業で学べる「テーマ」	芸術文化		
全学横断特別教育プログラム			

授業の概要	日本語学とは、日本語を研究する学問である。現代日本語を考える上でも、過去の日本語と比較する視点は欠かすことができない。本授業は、日本語史（日本語の歴史）の基本的事項を概説することを目的とする。「日本語史Ⅱ」では、中世、近世、近代（鎌倉時代から明治時代）を対象とする。
授業計画	第１回　ガイダンス、助動詞の変遷 第２回　拗音、和製漢語 第３回　歌学、定家仮名遣い 第４回　講読Ⅳ（聞書、抄物） 第５回　動詞の変遷 第６回　係り結び 第７回　長音、四つ仮名 第８回　講読Ⅴ（キリシタン資料） 第９回　出版、条件表現 第10回　上方語と江戸語 第11回　国学、歴史的仮名遣い 第12回　新漢語、外来語 第13回　言文一致 第14回　講読Ⅵ（江戸語資料） 第15回　国語辞書と文法書の成立、授業アンケート 期末試験
成績評価の方法	期末試験により評価する（100%）。期末試験は論述式で行い、日本語学（日本語史）の基本的事項を理解し、説明できるかどうかを評価の基準とする（持ち込み不可）。
成績評価の基準	日本語学（日本語史）の重要事項を最低限理解し表現できる水準への評価は「可（その水準にある）」 日本語学（日本語史）の重要事項を正確に理解し表現できる水準への評価は「良（やや上にある）」 日本語学（日本語史）の全体を理解し表現できる水準への評価は「優（かなり上にある）」 日本語学（日本語史）の全体を理解し自主的な学習の成果が認められる水準への評価は「秀（卓越している）」 上記に至らないものは「不可」
事前事後学習の内容	各回で取り扱った内容で理解できなかった部分・興味を持った部分について、参考書・各回の資料に挙げる参考文献を読む。日本語学に興味を持っている方は、以下の参考書を一読することを推奨する。期末試験前は、授業資料や参考書などで日本語学の基本的事項を復習する。
履修上の注意	高等学校までで学ぶ文法事項を復習し、理解しておく。不安な方は高等学校で用いていた文法書を持参するとよい。 「日本語学概論ⅠⅡ」「日本語史Ⅰ」を合わせて履修することを推奨する。日本語学の内容は難解なものが多いので、合わせて履修することで理解が深まる。「日本語史Ⅱ」は「日本語史Ⅰ」と連続する内容である。
質問、相談への対応	質問・相談用のformsにて受け付ける（URLはeALPSに掲載する）。
教科書	指定しない。
参考書	購入は必須ではない。 衣畑智秀（編）2023『基礎日本語学（第2版）』（ひつじ書房）9784823411953、1800円 木田章義（編）2013『国語史を学ぶ人のために』（世界思想社）9784790715962、2900円

参考書	風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健2004『言語学（第2版）』（東京大学出版会）9784130820097、2500円 佐藤武義（編）1995『概説日本語の歴史』（朝倉書店）9784254510195、2900円 野村剛史2010『話し言葉の日本史』（吉川弘文館）9784642057110、1870円

登録コード	L2730300	開講年度	2026

担当教員	鈴木　裕也	副担当	
授業科目	日本語学特論Ⅲ		
英文授業名	Linguistics of Japanese: Specialized Lecture Ⅲ		
授業タイトル	日本辞書史		

単位数	2	対象学生	2〜4	講義期間	後期	曜日・時限	金曜･２時限
講義室	人文第５講義室		遠隔授業科目		読替科目		

信大コンピテンシー	非該当

授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２２Lカリ，２０２１Lカリ，２０２０Lカリ		
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】自明とされる事柄に対し、深くその根拠を問い直し新たな認識を構築できる思索力	⇔	辞書資料の講読を通して、漢字音、声点、和訓などの日本語学（日本語史）の基本的事項について理解し、新たな視点で日本語について分析することができるようになる。
	２０２６Lカリ，２０２５Lカリ，２０２４Lカリ，２０２３Lカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	辞書資料の講読を通して、漢字音、声点、和訓などの日本語学（日本語史）の基本的事項について理解することができるようになる。
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】必要な情報を的確に収集し、理解し、発信する力が身についている。【メディアリテラシー・コミュニケーションリテラシー・外国語能力】	⇔	辞書資料の講読を通して、日本語学の新たな視点で日本語について分析することができるようになる。

授業で学べる「テーマ」	芸術文化、多文化協働
全学横断特別教育プログラム	

授業の概要	本授業では日本辞書史について概説し、資料を講読することにより、扱うことのできる日本語学の資料を増やすことを目的とする。特に古辞書資料を中心に講読する。
授業計画	第１回　ガイダンス、辞書の概説 第２回　辞書の分類、辞書の限界 第３回　玉篇と篆隷万象名義 第４回　一切経音義と新撰字鏡 第５回　倭名類聚抄 第６回　色葉字類抄 第７回　類聚名義抄 第８回　字鏡抄、下学集 第９回　韻書、類書 第10回　歌学と歌語辞書 第11回　対訳辞書（日葡辞書など） 第12回　倭玉篇、節用集 第13回　近世の辞書（倭訓栞など） 第14回　近代の辞書（言海など） 第15回　現代の辞書、授業アンケート 期末試験なし（期末レポート）
成績評価の方法	期末レポートにより評価する（100%）。期末レポートは、適切に辞書資料を調査できているかどうかを評価の基準とする。
成績評価の基準	日本語学（辞書）に関する基礎的な考え方を最低限身につけ、表現できる水準への評価は「可（その水準にある）」 日本語学（辞書）に関する基礎的な考え方を身につけ、表現できる水準への評価は「良（やや上にある）」 日本語学（辞書）に関する発展的な内容を理解し、表現できる水準への評価は「優（かなり上にある）」 日本語学（辞書）に関する発展的な内容を理解し、自主的な学習の成果が認められる水準への評価は「秀（卓越している）」 上記に至らないものは「不可」
事前事後学習の内容	各回で取り扱った内容で理解できなかった部分・興味を持った部分について、参考書・各回の資料に挙げる参考文献を読む。
履修上の注意	授業内で漢和辞書を用いることが多いので、用意しておくこと（高等学校で使用していたものや電子辞書でよい。図書館で借りてもよい）。 「日本語学概論」または「日本語史」を事前もしくは同時に受講していることが望ましい。
質問、相談への対応	質問・相談用のformsにて受け付ける（URLはeALPSに掲載する）。
教科書	使用しない。授業内で資料を配布する。
参考書	購入は必須ではない。 西崎亨（編）1995『日本古辞書を学ぶ人のために』（世界思想社） 沖森卓也（編）2023『図説日本の辞書100冊』（武蔵野書院） 頼惟勤・水谷誠（編）1996『中国古典を読むために　中国語学史講義』（大修館書店）

参考書	

登録コード	L2730400	開講年度	2026

担当教員	中澤　光平	副担当	
授業科目	日本語学特論IV		
英文授業名	Linguistics of Japanese: Specialized Lecture IV		
授業タイトル	日本語と有標性		

単位数	2	対象学生		講義期間	前期	曜日・時限	木曜･４時限
講義室	人文第２講義室		遠隔授業科目		読替科目	読替科目は履修案内を確認すること	

信大コンピテンシー	非該当		
授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２６Lカリ，２０２５Lカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	日本語学に関する概念・用語を十分理解し、日本語を言語学的な観点から分析することができる。
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】必要な情報を的確に収集し、理解し、発信する力が身についている。【メディアリテラシー・コミュニケーションリテラシー・外国語能力】	⇔	日本語（学）に関する文献を読み、その内容について、他の資料などを利用して批判的に検討し、自分の考えを論理的に提示することができる。
授業で学べる「テーマ」	芸術文化、多文化協働		
全学横断特別教育プログラム	ローカル･イノベーター養成コース		

授業の概要	日常の中で「変わっている」と感じる日本語の表現に出会うことがある。しかし、それはどのように変わっているのだろうか。あるいは、それは本当に変わっているのだろうか。また、日本語は「変わった言語」だと主張されることがある。しかし、日本語はどのように変わっているのだろうか。日本語は本当に変わった言語なのだろうか。「普通の表現」、「普通の言語」とは何だろうか。 言語学の概念で、一般的な形式を「無標」、特殊な形式を「有標」という。この授業では、日本語（現代共通語）を主な対象として、日本語の無標／有標の基準について議論することを通じて、有標性とは何かについて理解を深めることを目的とする。
授業計画	基本的に下記の計画通り進めるが、進行その他の理由によって順番や内容を変更する可能性がある。 第１回　ガイダンス：有標性とは何か 第２回　日本語の音の有標性（１）：母音と子音 第３回　日本語の音の有標性（２）：音節構造、アクセント 第４回　日本語の語形の有標性（１）：活用語と活用 第５回　日本語の語形の有標性（２）：品詞 第６回　日本語の配列の有標性（１）：語内部の形態素の順序 第７回　日本語の配列の有標性（２）：語順 第８回　日本語の語彙・意味の有標性（１） 第９回　日本語の語彙・意味の有標性（２） 第10回　日本語の表記の有標性（１） 第11回　日本語の表記の有標性（２） 第12回　これまでの振り返り 第13回　日本語の方言と有標性 第14回　日本語の有標性：日本語は有標な言語なのか 第15回　まとめ、授業アンケート
成績評価の方法	リアクションペーパーに基づく平常点（30%）と期末レポート（70%）をもとに評価する。 期末レポートの課題内容については第１回の授業でアナウンスする（eALPSにも掲載する）。 期末レポートは下記のいずれかを満たす場合に提出を認める。 ・出席が10回以上（初回、最終回を含む） ・アンケート（リアクションペーパー、授業アンケートとは別）への回答が８回以上
成績評価の基準	授業内容の重要事項を不完全ながらも理解し表現できる水準への評価は「可（その水準にある）」 授業内容の重要事項を正確に理解し表現できる水準への評価は「良（やや上にある）」 授業内容の全体を理解し表現できる水準への評価は「優（かなり上にある）」 授業内容の全体を理解したうえで自主的な学習の成果が認められる水準への評価は「秀（卓越している）」 上記に至らないものは「不可」
事前事後学習の内容	60時間以上の時間外学習が必要となる。期末レポートの作成に必要な時間を15時間程度として、予習・復習を毎回３時間程度行うこと。 講義で扱うテーマは事前に伝えるので、キーワードについて調べるなど、授業に備えて予習を行うこと。 また、期末レポートに向けて、講義で扱った内容の復習を行うこと。
履修上の注意	「日本語学概論Ⅰ・Ⅱ」を事前もしくは同時に受講していることが望ましい。これまでに「日本語学概論」を受講していない場合は今年度の「概論Ⅰ」を受講することを強く推奨する。
質問、相談への対応	できるだけ講義が終わった後に質問するように。授業後に提出を課すリアクションペーパーに質問事項を書いてもよい。必要であれば教員あてにメールでアポイントメントをとること（メールアドレスは kohein@shinshu-u.ac.jp）。

教科書	使用せず、毎回プリントを配布する。
参考書	授業中に適宜指示する。

登録コード	L2730700	開講年度	2026

担当教員	鈴木　裕也	副担当	
授業科目	日本語学基幹演習Ⅲ		
英文授業名	Linguistics of Japanese: Basic Seminar Ⅲ		
授業タイトル	日本古辞書の講読		

単位数	2	対象学生	2〜4	講義期間	前期	曜日・時限	木曜･２時限
講義室	人文２１２講義室		遠隔授業科目		読替科目		

信大コンピテンシー	非該当		
授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２２Lカリ，２０２１Lカリ，２０２０Lカリ		
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】自明とされる事柄に対し、深くその根拠を問い直し新たな認識を構築できる思索力	⇔	文献資料の本文に現れる日本語に疑問を持ち、辞書や工具書などを用いながら、それを考察する手法を修得することができるようになる。
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】情報を適切に集約・分析・表現できる高度なメディアリテラシー	⇔	分かりやすい発表をする手法を身につけるとともに、他者の発表に対して質問や意見を述べることができるようになる。
	２０２６Lカリ，２０２５Lカリ，２０２４Lカリ，２０２３Lカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	文献資料の本文に現れる日本語に疑問を持ち、辞書や工具書などを用いながら、それを考察する手法を修得することができるようになる。
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】必要な情報を的確に収集し、理解し、発信する力が身についている。【メディアリテラシー・コミュニケーションリテラシー・外国語能力】	⇔	分かりやすい発表をする手法を身につけるとともに、他者の発表に対して質問や意見を述べることができるようになる。
授業で学べる「テーマ」	芸術文化		
全学横断特別教育プログラム			

授業の概要	本授業では、平安時代に編纂された古辞書である『類聚名義抄』（言部）を読む。そこに現れる日本語に疑問や関心を持ち考察する演習形式の授業である。担当者が発表資料を作成し、他の受講生と質疑をする。日本語を考察するための視点・方法を学ぶことを目的とする。
授業計画	第１回　ガイダンス、担当順の決定 第２回　辞書、工具書の説明 第３回　『類聚名義抄』「凍」を読む 第４回　発表・討論（言、讀） 第５回　発表・討論（諫、議） 第６回　発表・討論（識、信） 第７回　発表・討論（詞、許） 第８回　発表・討論（設、訓） 第９回　発表・討論（試、詰） 第10回　発表・討論（話、課） 第11回　発表・討論（訛、註） 第12回　発表・討論（説、該） 第13回　発表・討論（謀、譴） 第14回　発表・討論（診、調） 第15回　発表・討論（誰、警）、授業アンケート 定期試験は行わない。
成績評価の方法	口頭発表（80%）、各回の質疑応答への積極的な参加（20%）。日本語学の問題を設定し、適切な手法で考察できるかどうかを評価の基準とする。
成績評価の基準	日本語学（辞書）の重要事項を最低限理解し表現できる水準への評価は「可（その水準にある）」 日本語学（辞書）の重要事項を正確に理解し表現できる水準への評価は「良（やや上にある）」 日本語学（辞書）の全体を理解し表現できる水準への評価は「優（かなり上にある）」 日本語学（辞書）の全体を理解し自主的な学習の成果が認められる水準への評価は「秀（卓越している）」 上記に至らないものは「不可」
事前事後学習の内容	発表者は資料調査を充分に行い、発表までに資料を完成させること。発表の準備には一ヶ月程度の長い期間を要する。 発表者以外の者は、あらかじめ本文を読み、問題となる点をまとめてから授業に臨むこと。
履修上の注意	漢和辞書を用いることが多いので、用意しておくこと（高等学校で用いていたものや電子辞書でよい）。 演習であるから遅刻や無断欠席は厳禁である。やむを得ず欠席する場合は必ず事前に連絡すること。 「日本語学発展演習Ⅲ」を履修する場合は本演習をあわせて履修することを推奨する。
質問、相談への対応	随時受け付けるが、口頭またはメールで事前に連絡すること。 メールアドレス　yuyasuzuki@shinshu-u.ac.jp
教科書	使用しない。授業内で資料を配布する。
参考書	購入は必須ではない。

参考書	西崎亨（編）（1995）『日本古辞書を学ぶ人のために』（世界思想社） 沖森卓也（編）（2023）『図説日本の辞書100冊』（武蔵野書院） 大島正二（2011）『中国語の歴史』（大修館書店）

登録コード	L2731000	開講年度	2026

担当教員	中澤　光平	副担当	
授業科目	日本語学基幹演習VI		
英文授業名	Linguistics of Japanese: Basic Seminar VI		
授業タイトル	日本語と方言研究（３）		

単位数	2	対象学生		講義期間	前期	曜日・時限	金曜･３時限
講義室	人文第５講義室		遠隔授業科目		読替科目	読替科目は履修案内を確認すること	

信大コンピテンシー	非該当

授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２２Ｌカリ，２０２１Ｌカリ，２０２０Ｌカリ		
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】情報を適切に集約・分析・表現できる高度なメディアリテラシー	⇔	文献を読み、その内容について、その他の日本語学の資料などを利用して、理解する能力が身につく。
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】他者の考えを明晰に理解し、自己の主張を的確に表現できる高度なコミュニケーションリテラシー	⇔	発表者と参加者が協力して議論を展開し理解を深めあうことができるようになる。
	２０２６Ｌカリ，２０２５Ｌカリ，２０２４Ｌカリ，２０２３Ｌカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	日本語諸方言を対象とした先行研究を学び、日本語学、言語学の方法論を身につけるとともに、先行研究を理解したうえで批判的に検討し、自らの主張が的確に表現できるようになる。
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】必要な情報を的確に収集し、理解し、発信する力が身についている。【メディアリテラシー・コミュニケーションリテラシー・外国語能力】	⇔	日本語諸方言についての文献を読み、その内容について、他の資料などを利用して、理解する能力が身についている。また、発表者と参加者が協力して議論を展開し理解を深めあうことができるようになる。

授業で学べる「テーマ」	芸術文化、多文化協働
全学横断特別教育プログラム	

授業の概要	日本語諸方言を研究する方法について、論文講読を通じて学ぶ。授業担当教員がテーマを設定し、テーマごとに講読する文献を指定する。指定された文献をもとに、受講生にプレゼンを行ってもらう。この活動を通じて、方言研究のための基礎知識を身につけ、方言研究を含む日本語研究について構想ができるようになることを目指す。 発表者は担当の日までにレジュメを用意すること。最初は授業担当教員がレクチャーを行う。発表をもとに最終レポートを作成し提出する。 講読する論文は各年度で違うため、同じテーマであっても授業展開は異なる。
授業計画	第１回　方言研究の方法 第２回　方言と音声・音韻 第３回　方言と文法 第４回　方言と語彙 第５回　方言と意味 第６回　方言と世代差 第７回　方言と歴史 第８回　方言と社会 第９回　方言と教育 第10回　東日本方言 第11回　西日本方言 第12回　九州方言 第13回　琉球諸語 第14回　方言はなぜ生じるか 第15回　方言調査法、授業アンケート
成績評価の方法	発表・議論への参加（50%）と期末レポート（50%）による。 演習のため、欠席が５回以上になる場合は議論への参加が不十分と判断し単位を認定しない。ただし、やむを得ない事情による欠席の場合は考慮することがあるので、必ず事前に連絡すること。また、無断欠席が２回以上あると単位を認定しない。 出席していても発言がない場合は議論に参加していると評価しない。
成績評価の基準	日本語（方言学）の重要事項を最低限理解し表現できる水準への評価は「可（その水準にある）」 日本語（方言学）の重要事項を正確に理解し表現できる水準への評価は「良（やや上にある）」 日本語（方言学）の全体を理解し表現できる水準への評価は「優（かなり上にある）」 日本語（方言学）の全体を理解したうえで自主的な学習の成果が認められる水準への評価は「秀（卓越している）」 上記に至らないものは「不可」
事前事後学習の内容	発表前はレジュメ作成のため、課題の文献を読み込むだけでなく参考書なども調べて準備する。発表後は発表時の議論内容を復習して、期末レポートの提出に備える。 発表担当回以外は、事前に文献を読んで質問を考えるなど議論参加のための準備をしておく。
履修上の注意	演習であるから遅刻や無断欠席は特に厳禁である。やむを得ず欠席する場合は事前に必ず連絡すること。やむを得ない事情で事前連絡が困難だった場合（要証明）を除き、授業開始後に連絡しても無断欠席とし

履修上の注意	て扱う。 日本語学研究室所属（予定）の学生は、本演習とあわせて後期の「日本語学発展演習VI」を履修すること。 方言研究に関心があるのであれば、他コースの学生であっても履修を認める。
質問、相談への対応	随時受け付けるが、口頭もしくはメールでアポイントメントを取ること。 メールアドレスはkohein@shinshu-u.ac.jp
教科書	講読する文献は授業の初回でアナウンスし、コピーを配布するかeALPSにアップロードする。
参考書	井上史雄ほか（編著）（2016）『はじめて学ぶ方言学　ことばの多様性をとらえる28章』ミネルヴァ書房 木部暢子ほか（編著）（2013）『方言学入門』三省堂 小林隆・篠崎晃一（編）（2007）『ガイドブック方言調査』ひつじ書房

登録コード	L2740300	開講年度	2026

担当教員	鈴木　裕也	副担当	
授業科目	日本語学発展演習Ⅲ		
英文授業名	Linguistics of Japanese: Advanced Seminar Ⅲ		
授業タイトル	日本古辞書の講読、調査		

単位数	2	対象学生	2〜4	講義期間	後期	曜日・時限	木曜･２時限
講義室	人文第５講義室		遠隔授業科目		読替科目		

信大コンピテンシー	非該当

授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２２Ｌカリ，２０２１Ｌカリ，２０２０Ｌカリ		
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】自明とされる事柄に対し、深くその根拠を問い直し新たな認識を構築できる思索力	⇔	文献資料の本文に現れる日本語に疑問を持ち、基幹演習で発見した問題を考察する手法を修得することができるようになる。
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】情報を適切に集約・分析・表現できる高度なメディアリテラシー	⇔	考察内容を論理的に分かりやすくまとめ、発表をする手法を身につけるとともに、他者の発表に対して質問や意見を述べることができるようになる。
	２０２６Ｌカリ，２０２５Ｌカリ，２０２４Ｌカリ，２０２３Ｌカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	文献資料の本文に現れる日本語に疑問を持ち、基幹演習で発見した問題を考察する手法を修得することができるようになる。
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】必要な情報を的確に収集し、理解し、発信する力が身についている。【メディアリテラシー・コミュニケーションリテラシー・外国語能力】	⇔	考察内容を論理的に分かりやすくまとめ、発表をする手法を身につけるとともに、他者の発表に対して質問や意見を述べることができるようになる。

授業で学べる「テーマ」	芸術文化
全学横断特別教育プログラム	

授業の概要	本授業では、平安時代に編纂された古辞書である『類聚名義抄』（言部）を読む。前期の基幹演習で発見した疑問について考察する演習形式の授業である。担当者が発表資料を作成し、他の受講生と質疑をする。日本語を考察するための視点・方法を学ぶこと、考察内容を論理的に分かりやすく伝える手法を身につけることを目的とする。
授業計画	第１回　ガイダンス、担当順の決定 第２回　考察の構想発表（前半） 第３回　考察の構想発表（後半） 第４回　発表・討論（言、讀） 第５回　発表・討論（諫、議） 第６回　発表・討論（識、信） 第７回　発表・討論（詞、許） 第８回　発表・討論（設、訓） 第９回　発表・討論（試、詰） 第10回　発表・討論（話、課） 第11回　発表・討論（訛、註） 第12回　発表・討論（説、該） 第13回　発表・討論（謀、譴） 第14回　発表・討論（診、調） 第15回　発表・討論（誰、警）、授業アンケート 定期試験は行わない。
成績評価の方法	口頭発表（80%）、各回の質疑応答への積極的な参加（20%）。日本語学の問題を設定し、適切な手法で考察できるかどうか、考察を分かりやすく発表できるかどうかを評価の基準とする。
成績評価の基準	日本語学（辞書）の重要事項を最低限理解し表現できる水準への評価は「可（その水準にある）」 日本語学（辞書）の重要事項を正確に理解し表現できる水準への評価は「良（やや上にある）」 日本語学（辞書）の全体を理解し表現できる水準への評価は「優（かなり上にある）」 日本語学（辞書）の全体を理解し自主的な学習の成果が認められる水準への評価は「秀（卓越している）」 上記に至らないものは「不可」
事前事後学習の内容	発表者は資料調査を充分に行い、発表までに資料を完成させること。発表の準備には一ヶ月程度の長い期間を要する。 発表者以外の者は、あらかじめ本文を読み、問題となる点をまとめてから授業に臨むこと。
履修上の注意	漢和辞書を用いることが多いので、用意しておくこと（高等学校で用いていたものや電子辞書でよい）。 演習であるから遅刻や無断欠席は厳禁である。やむを得ず欠席する場合は必ず事前に連絡すること。 「日本語学基幹演習Ⅲ」を受講済みであることが望ましい。
質問、相談への対応	随時受け付けるが、口頭またはメールで事前に連絡すること。 メールアドレス　yuyasuzuki@shinshu-u.ac.jp
教科書	使用しない。授業内で資料を配布する。

参考書	購入は必須ではない。 西崎亨（編）（1995）『日本古辞書を学ぶ人のために』（世界思想社） 沖森卓也（編）（2023）『図説日本の辞書100冊』（武蔵野書院） 大島正二（2011）『中国語の歴史』（大修館書店）

登録コード	L2740600	開講年度	2026

担当教員	中澤　光平	副担当	
授業科目	日本語学発展演習VI		
英文授業名	Linguistics of Japanese: Advanced Seminar VI		
授業タイトル	方言研究の実践（３）		

単位数	2	対象学生		講義期間	後期	曜日・時限	金曜･３時限
講義室	人文第５講義室		遠隔授業科目		読替科目	読替科目は履修案内を確認すること	

信大コンピテンシー	非該当		
授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２２Lカリ，２０２１Lカリ，２０２０Lカリ		
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】情報を適切に集約・分析・表現できる高度なメディアリテラシー	⇔	日本語諸方言についての文献を読み、その内容について、その他の日本語学の資料などを利用して、理解する能力が身につく。
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】他者の考えを明晰に理解し、自己の主張を的確に表現できる高度なコミュニケーションリテラシー	⇔	発表者と参加者が協力して議論を展開し理解を深めあうことができるようになる。
	２０２６Lカリ，２０２５Lカリ，２０２４Lカリ，２０２３Lカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	日本語諸方言を対象とした先行研究を学び、日本語学、言語学の方法論を身につけるとともに、先行研究を理解したうえで批判的に検討し、自らの主張が的確に表現できるようになる。
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】必要な情報を的確に収集し、理解し、発信する力が身についている。【メディアリテラシー・コミュニケーションリテラシー・外国語能力】	⇔	日本語諸方言についての文献を読み、その内容について、他の資料などを利用して、理解する能力が身につく。また、発表者と参加者が協力して議論を展開し理解を深めあうことができるようになる。
授業で学べる「テーマ」	芸術文化、多文化協働		
全学横断特別教育プログラム			

授業の概要	授業の前半では日本語諸方言を調査する方法について学び、後半では実際に調査を行った上で調査結果を発表してもらう。 受講生は授業の前半で取り組む研究テーマを決定し、調査票を作成する。授業で調査計画についてディスカッションし、ブラッシュアップして実際の調査に備える。 後半では方言調査を実施し、結果報告を行う。仮説と調査結果とその分析を踏まえ、改善点などについて議論する。議論をまとめ、期末レポートを作成する。
授業計画	第１回　方言調査の方法 第２回　方言調査準備（１）：調査計画（仮説と調査内容の整理） 第３回　方言調査準備（２）：調査票の作成 第４回　方言調査準備（３）：調査計画についてのディスカッション 第５回　方言調査準備（４）：調査票についてのディスカッション 第６回　方言調査の実施（１）：調査地・調査協力者の決定 第７回　方言調査の実施（２）：調査先への連絡 第８回　方言調査の実施（３）：調査の実施 第９回　方言調査の実施（４）：調査後の諸対応 第10回　調査結果報告（１）：調査結果の取りまとめ（１） 第11回　調査結果報告（２）：調査結果の取りまとめ（２） 第12回　調査結果報告（３）：発表資料の作成（１） 第13回　調査結果報告（４）：発表資料の作成（２） 第14回　ディスカッション：仮説と調査結果とその分析 第15回　まとめ、授業アンケート
成績評価の方法	発表・議論への参加（50%）と期末レポート（50%）による。 演習のため、欠席が５回以上になる場合は議論への参加が不十分と判断し単位を認定しない。ただし、やむを得ない事情による欠席の場合は考慮することがあるので、必ず事前に連絡すること。また、無断欠席が２回以上あると単位を認定しない。 出席していても発言がない場合は議論に参加していると評価しない。
成績評価の基準	日本語（方言学）の重要事項を最低限理解し表現できる水準への評価は「可（その水準にある）」 日本語（方言学）の重要事項を正確に理解し表現できる水準への評価は「良（やや上にある）」 日本語（方言学）の全体を理解し表現できる水準への評価は「優（かなり上にある）」 日本語（方言学）の全体を理解したうえで自主的な学習の成果が認められる水準への評価は「秀（卓越している）」 上記に至らないものは「不可」
事前事後学習の内容	発表前はレジュメ作成のため、文献を読み込むだけでなく参考書なども調べて準備する。発表後は発表時の議論内容を復習して、期末レポートの提出に備える。 発表担当回以外は、事前に文献を読んで質問を考えるなど議論参加のための準備をしておく。
履修上の注意	演習であるから遅刻や無断欠席は特に厳禁である。やむを得ず欠席する場合は事前に必ず連絡すること。やむを得ない事情で事前連絡が困難だった場合（要証明）を除き、授業開始後に連絡しても無断欠席として扱う。

履修上の注意	日本語学研究室所属（予定）の学生は、本演習とあわせて前期の「日本語学基幹演習VI」を履修すること。 方言調査に関心があるのであれば、他コースの学生であっても履修を認める。
質問、相談への対応	随時受け付けるが、口頭もしくはメールでアポイントメントを取ること。 メールアドレスはkohein@shinshu-u.ac.jp
教科書	なし。
参考書	井上史雄ほか（編著）（2016）『はじめて学ぶ方言学　ことばの多様性をとらえる28章』ミネルヴァ書房 木部暢子ほか（編著）（2013）『方言学入門』三省堂 小林隆・篠崎晃一（編）（2007）『ガイドブック方言調査』ひつじ書房

登録コード	L2830400	開講年度	2026

担当教員	杉村　泰	副担当	

授業科目	日本語教育学特論IV

英文授業名	Pedagogy of Japanese as a Foreign Language: Specialized Study IV

授業タイトル	日本語教育における誤用分析とフィードバック

単位数	2	対象学生		講義期間	前期(集中)	曜日・時限	集中･不定期
講義室	人文第５講義室		遠隔授業科目		読替科目	読替科目は履修案内を確認すること	

信大コンピテンシー	非該当

授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２６Lカリ，２０２５Lカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	外国人学習者に対する日本語教師や母語話者の言語的フィードバックの特徴とその効果的な方法を学ぶことを通じ、学習者の日本語使用上の問題と、教師や母語話者の意識的・無意識的な日本語運用を分析し検討できる。
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】必要な情報を的確に収集し、理解し、発信する力が身についている。【メディアリテラシー・コミュニケーションリテラシー・外国語能力】	⇔	異文化間コミュニケーションに関わる事象を日本語教育の観点から批判的に考え、言語の知識と運用をとらえ直して、コミュニケーションリテラシーを実際のコミュニケーションの場で生かすことができる。

授業で学べる「テーマ」	多文化協働、キャリア
全学横断特別教育プログラム	

授業の概要	本授業では、外国人日本語学習者の日本語産出に対する日本語教師の誤用分析とフィードバックの方法について学ぶ。日本語学習者の発音、表記、文法などについて、日本語母語話者との違いを観察し、誤用の特徴を分析し、母語転移の可能性や誤用の中に見られる規則性の有無を検討する。その上で、明示的でわかりやすい説明や、学習者の日本語理解と使用を促す教師の指導技術を学ぶ。

授業計画	第１回：履修ガイダンス／日本語学習者の日本語作文の添削 第２回：日本語学習者の発話と教師の訂正 第３回：文法シラバスと場面シラバス 第４回：日本語の教科書分析 第５回：日本語の「は」と「が」の指導案の検討 第６回：日本語の格助詞の指導法の検討１（「に」と「と」/「に」と「で」） 第７回：日本語の格助詞の指導法の検討２（「に」と「へ」） 第８回：日本語の格助詞の指導法の検討３（「を」と「から」） 第９回：コーパス（BCCWJ・少納言）を活用した日本語研究 第10回：コーパス（茶漉）を活用した日本語研究 第11回：日本語学習者の誤用とフィードバック１（格助詞） 第12回：日本語学習者の誤用とフィードバック２（動詞） 第13回：日本語学習者の誤用とフィードバック３（名詞） 第14回：日本語学習者の誤用と中間言語 第15回：まとめ・授業のふりかえり（授業アンケート） 定期試験 なお、本授業の計画については可変シラバスを取り入れ、受講学生の理解度により、取り上げるテーマや各回の計画を変更することがあり得る。 講義日程 8月5日　1限～4限 8月6日　1限～4限 8月7日　1限～4限 8月10日　1限～4限（オンライン）

成績評価の方法	以下の2点とその割合によって、先に挙げた本授業の目標の達成度を測り、評価する。 授業15週の授業への参加度（50%）・授業15週終了後の最終の定期試験（50%） 学期末に行う定期試験（100点満点）では、15回の授業で取り上げた事象について論述を求めます。

成績評価の基準	毎回の授業においても定期試験においても、日本語学や日本語教育における基本的な知識で問題が解ければ「合格水準にある」、自分なりの例を示して解答ができれば「やや上にある」、適切な例文を示し、自分の新しい考えで解答ができれば「かなり上にある」、内容が斬新でかつ説得力のある論述ができていれば「卓越している」。

事前事後学習の内容	次回の授業で扱うテーマについて、適宜授業内で提示し、次回の授業までに考えてくる。これを元に次の授業で討論を行う。また、討論によって新たに出た課題について、事後学習として考えて来て、次の授業で再検討を行う。

履修上の注意	1)講義形式の授業であるが、毎回課題を出し、受講生の積極的な発言を求める。 2)パソコンを使った言語分析を行うため、Wi-Fiの使える個人用のパソコンを持参すること。

質問、相談への対応	授業の前後またはメールで随時受け付ける。（sugimura.yasushi.j7@f.mail.nagoya-u.ac.jp）

教科書	使用しない。授業の中でレジュメや資料などを配布する。
参考書	授業の中で適宜、紹介する。

登録コード	L2830500	開講年度	2026

担当教員	伊藤　奈津美	副担当	
授業科目	日本語教育学特論Ⅴ		
英文授業名	Pedagogy of Japanese as a Foreign Language: Specialized Study Ⅴ		
授業タイトル	行動中心アプローチの日本語教育と授業設計		

単位数	2	対象学生		講義期間	前期(集中)	曜日・時限	集中･不定期
講義室	人文第５講義室		遠隔授業科目		読替科目	読替科目は履修案内を確認すること	

信大コンピテンシー	非該当		
授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２２Ｌカリ，２０２１Ｌカリ，２０２０Ｌカリ		
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】自明とされる事柄に対し、深くその根拠を問い直し新たな認識を構築できる思索力	⇔	外国語教育の動向について、その背景にある考え方や意図、目的を理解し、その考え方に基づく日本語の授業を分析し、設計できるようになる。
	【2022年度以前ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】異質・多様なものを理解し、寛容かつ多元的に判断することができる受容力	⇔	日本語学習者への日本語教育における教授法・アプローチについて、その教育的意図や特徴を分析的に考えることができる。
	２０２６Ｌカリ，２０２５Ｌカリ，２０２４Ｌカリ，２０２３Ｌカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	第二言語としての日本語指導におけるコミュニケーション活動とその教材作成や、日本語教師に必要な知識や指導技術を具体的に検討できる。
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】必要な情報を的確に収集し、理解し、発信する力が身についている。【メディアリテラシー・コミュニケーションリテラシー・外国語能力】	⇔	日本語教師としての役割を理解し、授業活動だけではなく、パフォーマンス評価、ICT活用と著作権へ配慮を前提にコース全体を検討できる。
授業で学べる「テーマ」	多文化協働、キャリア		
全学横断特別教育プログラム			

授業の概要	授業では、日本語教育の参照枠の基盤となったCEFRの概念と理論的背景を学ぶ。その理解に基づき、行動中心アプローチを踏まえた日本語授業の設計原理と方法を扱い、授業設計上の要点を整理する。あわせて、コース全体を見通した評価設計、教材作成における著作権の基礎知識、コミュニケーション活動の計画・運用における留意点を学び、総合的に授業を設計できる力の育成を目指す。
授業計画	第１回： オリエンテーション／外国語教育の動向－CEFRとCan-do－ 第２回： 日本語教育の基盤：日本語教育の参照枠 第３回： 日本語教育の基盤：課題遂行能力とCan-do 第４回： 日本語教育の基盤：行動中心アプローチとコミュニカティブ・アプローチ 第５回： 授業設計：Can-doの記述 第６回： 授業設計：第二言語習得プロセス 第７回： 授業設計：事例『みんなの日本語』を分析する 第８回： 授業設計：事例『まるごと　活動』を分析する 第９回： 授業設計：事例『まるごと　理解』を分析する 第10回：授業設計：初級の授業を設計する 第11回：授業設計：IDで授業設計を可視化する 第12回：授業設計：テストとパフォーマンス評価 第13回：授業設計：ルーブリック評価を考える 第14回：授業設計：ICTと著作権 第15回：まとめ・授業のふりかえり（授業アンケート） なお、本授業の計画および最終レポートについては、受講学生の理解度により、取り上げるテーマや各回の計画を変更することがあり得る。 授業日 9月7日（月）～9月11日（金）　各1限～3限
成績評価の方法	以下の3点とその割合によって、先に挙げた本授業の目標の達成度を測り、評価する。 授業15週の授業への参加度（50%）・課題（20%）・授業15週終了後の最終レポート提出（30%）、最終レポートでは、15回の授業で取り上げた事象について論述を求めます。
成績評価の基準	授業での質疑応答や討議に積極的かつ能動的に準備し参加できることに加え、最終レポートにおいて、授業で学んだ基本的概念を基に正確かつ論理的に説明できれば、本授業の達成目標の「水準にある」と判定する。加えて、適切な具体例を挙げられるならば水準の「やや上にある」とし、基本的概念と具体例を統合的に用いて応用的に説明できるならば水準の「かなり上にある」と判定する。さらに、授業で扱った諸問題が複合的に見られる課題について、具体例を挙げつつ、重要な基本的概念を統合的に用いて応用的かつ発展的に論じられる場合は水準を「卓越している」と判定する。
事前事後学習の内容	各回の授業内で取り上げたテーマやトピックに関して、発展的に考えたり調べたりすることを求める。また、自身の経験や意見をまとめることを求める。以上の課題は、授業を行うなかで意見発表や討論に用いる（オンラインで提出）。
履修上の注意	講義に加え、グループワークを行う。正解を求めるものではなく、自由な意見交換を行うことを希望しており、授業への積極的な参加を望む。

質問、相談への対応	授業の前後あるいはメール（itohnatsumi06@gmail.com）で対応する。
教科書	使用しない。授業の中でレジュメや資料などを配布する。
参考書	『CAN-DOで教える　課題遂行型の日本語教育』（来嶋洋美・八田直美・二瓶知子著、三修社、2024年）そのほか、授業内で適宜、紹介する。

登録コード	L2830900	開講年度	2026

担当教員	片所　由生	副担当	
授業科目	日本語教育学基幹演習Ⅲ		
英文授業名	Pedagogy of Japanese as a Foreign Language: Basic Seminar Ⅲ		
授業タイトル			

単位数	2	対象学生		講義期間	前期	曜日・時限	金曜･４時限
講義室	人文２０６演習室		遠隔授業科目		読替科目	読替科目は履修案内を確認すること	

信大コンピテンシー	非該当		
授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素	⇔	【授業の達成目標】
	２０２６Lカリ，２０２５Lカリ		
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】	⇔	外国人対象の日本語教科書から文法や表現形式の特徴を整理し、学習段階や四技能との関連をふまえて日本語教育で重要な言語項目の特徴を分析し、指導のあり方を専門的に理解する。
	【2023年度以降ｶﾘｷｭﾗﾑ対象】必要な情報を的確に収集し、理解し、発信する力が身についている。【メディアリテラシー・コミュニケーションリテラシー・外国語能力】	⇔	日本語教育の対象となる文法・語彙を専門的な観点や知識を基に観察・分析して、日本語教材を批判的に読み解けるリテラシーを向上させる。
授業で学べる「テーマ」	多文化協働、キャリア		
全学横断特別教育プログラム			

授業の概要	本授業では、中級学習者対象の日本語教科書を分析し、コース・授業運営での利用のあり方、教科書の背後にある教育目的や意図をふまえ、日本語指導の特徴を把握する。特に、学習項目となる文法・表現文型の言語的特徴、配列方法とその教育的意図・配慮に着目して教科書分析を行う。また、受講学生による教科書分析をもとに、日本語教育学と日本語学を関連づけた教科書分析と演習を行う。それにより、中級日本語教育の指導・学習内容に対する理解を深め、また学習者の日本語習得プロセスと教科書との関連性の分析、外国人への日本語支援や研究論文読解などに必要な日本語能力・指導技術と専門知識を身につける。
授業計画	日本語教科書について担当者が各課の内容を解説し、それをふまえ日本語教育における文法・表現文型の扱い方を中心に討論を行う。日本語教科書の分析と併せて、以下のようなテーマに沿って授業を進める。 第1回：履修ガイダンス／日本語教育と教室・コース運営での日本語教材利用と対象学習者 第2回：日本語教科書とシラバス：プログラムとその目的との関連性 第3回：日本語教科書の内容と構成：学習段階に応じた教科書利用と授業実践 第4回：初級日本語教科書の特徴1（学習段階に応じた文法項目の精選と指導法） 第5回：初級日本語教科書の特徴2（語彙項目と四技能別指導） 第6回：初級日本語教科書の特徴3（「表現文型」という学習項目の分析と指導技術） 第7回：文法中心の折衷型シラバスによる日本語教科書の分析1（学習項目配列とコース運営） 第8回：文法中心の折衷型シラバスによる日本語教科書の分析2（初級との連続性と学習者の習得過程） 第9回：文法中心の折衷型シラバスによる日本語教科書の分析3（文体的特徴・フォーマリティと読解） 第10回：文法中心の折衷型シラバスによる日本語教科書の分析4（待遇表現と教室内外の学習機会作り） 第11回：文法中心の折衷型シラバスによる日本語教科書の分析5（表現文型とコミュニケーション） 第12回：文法中心の折衷型シラバスによる日本語教科書の分析6（表現文型と四技能指導のあり方） 第13回：文法中心の折衷型シラバスによる日本語教科書の分析7（学習者評価と中間言語） 第14回：文法中心の折衷型シラバスによる日本語教科書の分析8（日本語リソースと教育ツールの活用） 第15回：まとめ・授業のふりかえり（授業アンケート） 定期試験（レポート） なお教科書の扱い方や各回の授業計画は、受講生の学習段階や理解度により変更しうる。
成績評価の方法	以下の2点とその割合によって、先に挙げた本授業の目標の達成度を測り、評価する。 授業15週の授業への参加度（50%）・授業15週終了後の最終の定期試験（50%） 学期末に行う定期試験（レポート）では、15回の授業で取り上げた事象について論述を求める。
成績評価の基準	授業で行う発表や討議に対して積極的かつ能動的に準備し参加できることに加え、レポート課題に対して適切にテーマを設定し、授業で学んだ研究手法や専門的概念をふまえて論理的に論述できれば、本授業の達成目標の「水準にある」と判定する。加えて、適切なデータを挙げつつ論述できるならば水準の「やや上にある」とし、基本的概念とデータを統合的に用いて論述できるならば水準の「かなり上にある」と判定する。さらに、授業で学んだ事項を統合的に用い、データを用いつつ、応用的かつ発展的に、そして複眼的に論述できる場合は水準を「卓越している」と判定する。
事前事後学習の内容	各回の授業で扱うテキストの範囲を事前に精読し、関連事項を調べるほか、疑問点や批判的コメントを準備して授業に臨むこと。また発表にあたっては、テキストの担当箇所の概要をわかりやすく簡潔に説明できるよう資料準備を行うこと。以上の課題は授業での発表や討論に用いるため印刷して持参し、授業終了時に提出する。教員により添削された課題については、さらに発展的に調べてまとめることを求める。
履修上の注意	1)授業の運営方法や報告分担などは学生の履修状況により柔軟に対応する。 2)受講学生は、教科書の精読や補足的な下調べなどを十分に行い、授業での報告に臨む必要がある。 3)意見の提示や交換を積極的に行うなど、積極的に授業に参加してほしい。
質問、相談への対応	毎回の授業終了後に直接対応する。授業日以外に質問や相談がある場合はメールで対応する。 メールアドレス：katasho@shinshu-u.ac.jp

教科書	『みんなの日本語 中級Ⅰ本冊』『みんなの日本語 中級Ⅱ本冊』（スリーエーネットワーク） また、授業運営に際して必要となる日本語教科書も必要に応じて提示し、授業で用いる。
参考書	授業の中で適宜、紹介する。また、授業の中でレジュメや資料などを配布する。